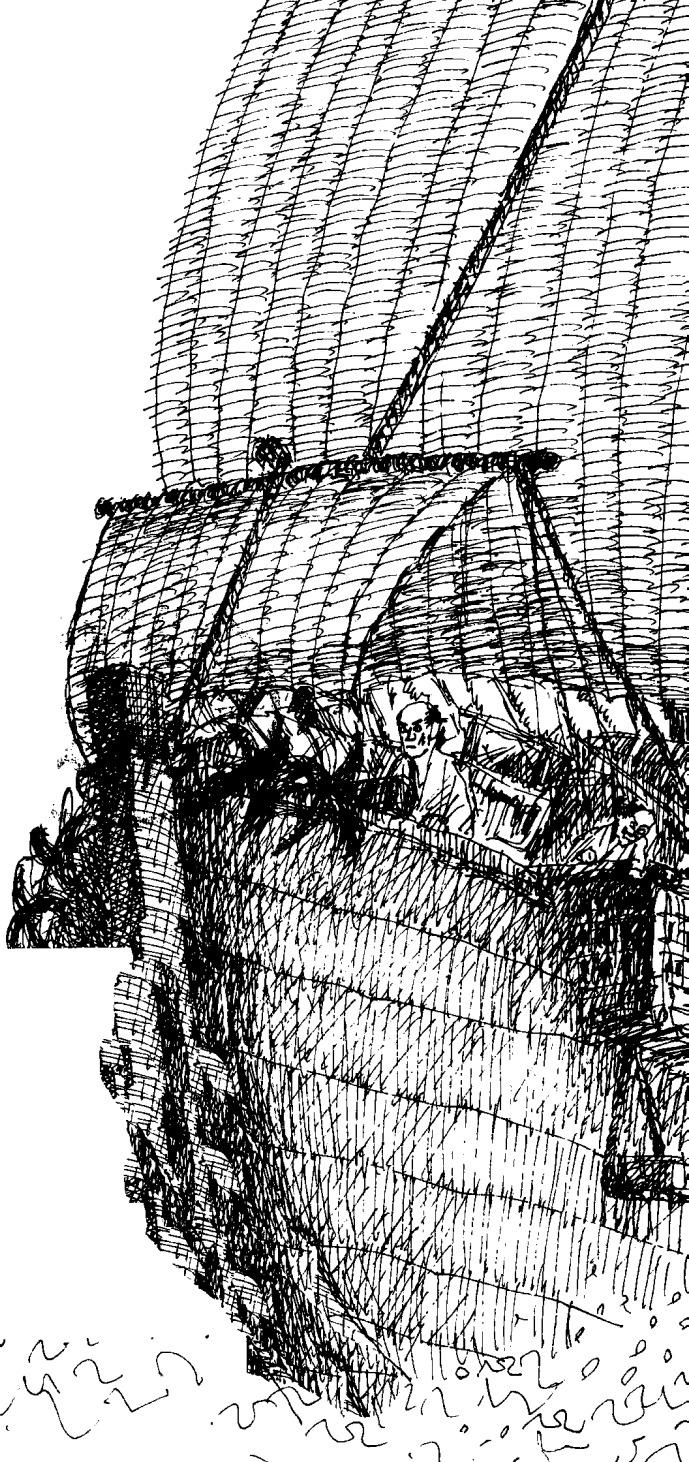
波浮（はぶ）の平六

来栖良夫 作　北島新平 画

浜浮の平六

来栖良夫 作



見返し歌詞「波浮の港」
日本音楽著作権協会許諾番号第8011970号

ほるぷ創作文庫

波浮の平六
1981年2月10日　初版発行
1981年5月1日　2刷発行

著者　来栖良夫©
画家　北島新平©

発行者　中森蒔人
編集者　松江隆信
発行所　株式会社　ほるぷ出版
東京都新宿区新宿2-19-13
サカゼンビル
〒160 TEL (03) 354-7031(代)
振替東京 9-43550
印刷所　(株)新日本印刷　(有)幸英社印刷
製本所　株式会社　難波製本所

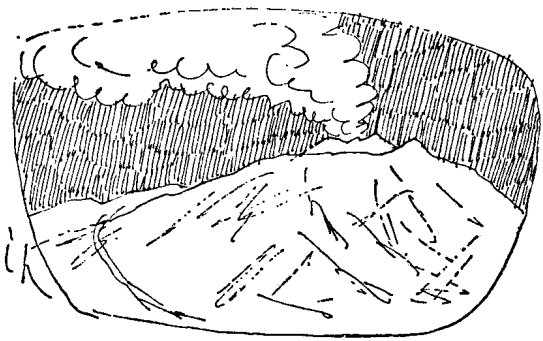
NDC 913　240p　151×208cm　8093-540020-7791

もくじ

一　チョボ一勝負……5
二　桑の木を買う男……15
三　上総の夜ばなし……24
四　にげだす平六……33
五　雨やどり……42
六　伊豆の島じま……57
七　江戸のうちこわし……71
八　弁天堂のまちぶせ……83
九　大島だより……93
一〇　海につながる湖……108
一一　難破船三吉丸……120

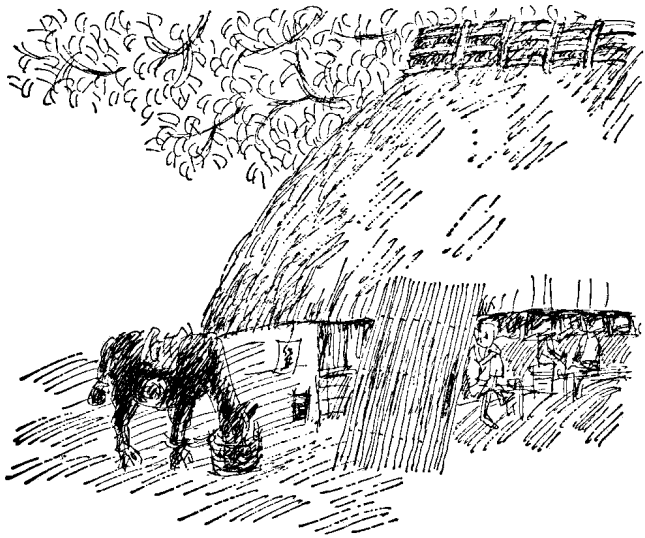
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一二　ジャガタライモ……130
一三　海鳴り……138
一四　江戸と御蔵島……147
一五　港づくり……162
一六　ツバキの花の島……173
一七　波浮の朝あけ……187
一八　島をさる人……197
一九　うごく巨岩……208
二〇　村づくり……220
二一　無人島の夢……229
あとがき……237



絵　北島新平
装丁　辻村益朗

一　チョボ一勝負



――安永六年（一七七七年）七月。

その日も、真夏の太陽の下で上総の海がのんびりとくつろいでいた。ひとつ、ふたつ、うかんでみえる白帆は、はり絵のようにうごかない。

夜あけまえの市宿から、筏や小舟をおとして、この大堀までぬけるのは、きょうがはじめてではないが、山おくぐらしの平六らには、まっ昼まの海のあおさが目にしみた。

「――音や、あのへんの日かげで、腹ごしらえをしようかい。」

と、平六が目をほそめてさきにたった。ふみしめる砂は、足のうらをこがすようである。平六は二十才、つづく植畑村の音松も十九になっていた。ひとつちがいだが、大がらな平六は、四つも五つもとし上にみえた。

浜べの松林の中を潮風がふきぬけていた。

時刻は、四つ半（午前十一時）をまわったころである。日かげをつくっている松の根かたへ、ふたりがすわりこもうとしたとき、

「――おうい、兄いたち。」

声をかけながら、磯なれ松のあいだをぬって、はしりだしてきたものがある。

みれば子ども――それも七、八人にもなった。さきへたったのが、ガキ大将らしく、まっくろによごした顔へうすらわらいをうかべながら、

「けっこうなお天気じゃねえか。」

とすりよってきた。べつのひとりがいった。

「こんな日にゃ、チョボ一でひと勝負するのもわるくねえぜ。どうだ、おめえたち。」

――子どもの口から、こんなさそいをうけようとはおもってもみなかったから、ふたりはぼんやりつったっていた。

丁半勝負の博奕のうちでも、サイコロひとつだけをつかうものを「チョボ一」という。

この大堀から、坂田、畑沢、貝淵と、海べにそって東北へむかうと、江戸がよいの船でにぎわう木更津の港がある。ここは、上総の物産をつみこみ、また江戸くだりの荷をおろすことを公儀（幕府）からゆるされた港だけに、人のでいりもはげしい。いきおい博奕場などもできる。そこまで足をのばして、土地のあそび人にさそいをかけられたこともないではないが、なにせ子ども

から「チョボ一」をいどまれたのは、あとにもさきにも、これがはじめてだろう。
「どうした、どうした。」
七、八人は、ふたりをみくらべながら、口ぐちにはやしたてた。
「サイコロばかりは運しだいだぜ。運がよけりゃ、兄いたちのもうけだ。」
「おめえら、銭はもっていねえのかよ。」
平六がわらってみせた。
「おう、浜の子ども衆かい。そんならしってのとおりだ。おいらは、市宿から筏をながしてきただけだから、あいにくお宝のもちあわせはねえ。」
「ちぇっ、時化てやがるぜ。——おい、そっちの色のくろい兄い。おめえのもってるのはなんだ。」
「てめえら、目ん玉はねえのか。こいつはおいらのくいものだ！」
音松が、声をはりあげると、子どもたちはぎょっとしてあとずさりをしたが、なかのひとりが舌なめずりをして、
「ふん、どうせ山猿のくいもんだ。ろくなもんでもねえだろうが、まあ、いいやね。そいつで勝負をやらかそうじゃねえか。みんな腹がへったじぶんだわな。」
「いいかげんにしやがれ、こいつら！」

音松がこぶしをふりあげた。子どものときから、くるくるたちはたらいてきたこの男は、気性もはげしい。

「やい、大堀あたりの魚くさいガキどもをあいてにするほどひまじゃあねえ。うろうろしやがるとはりたおすぞ！」

子どもたちは、

「おっ！」

ととびのいたが、そのまま一目散ににげにかかるかとおもうと、そうではない。めいめいが、すばやく足もとの砂をつかんでみがまえた。

そのときである。

「およし、子ども衆！」

と、松林のそばの茶店から声がとんだ。

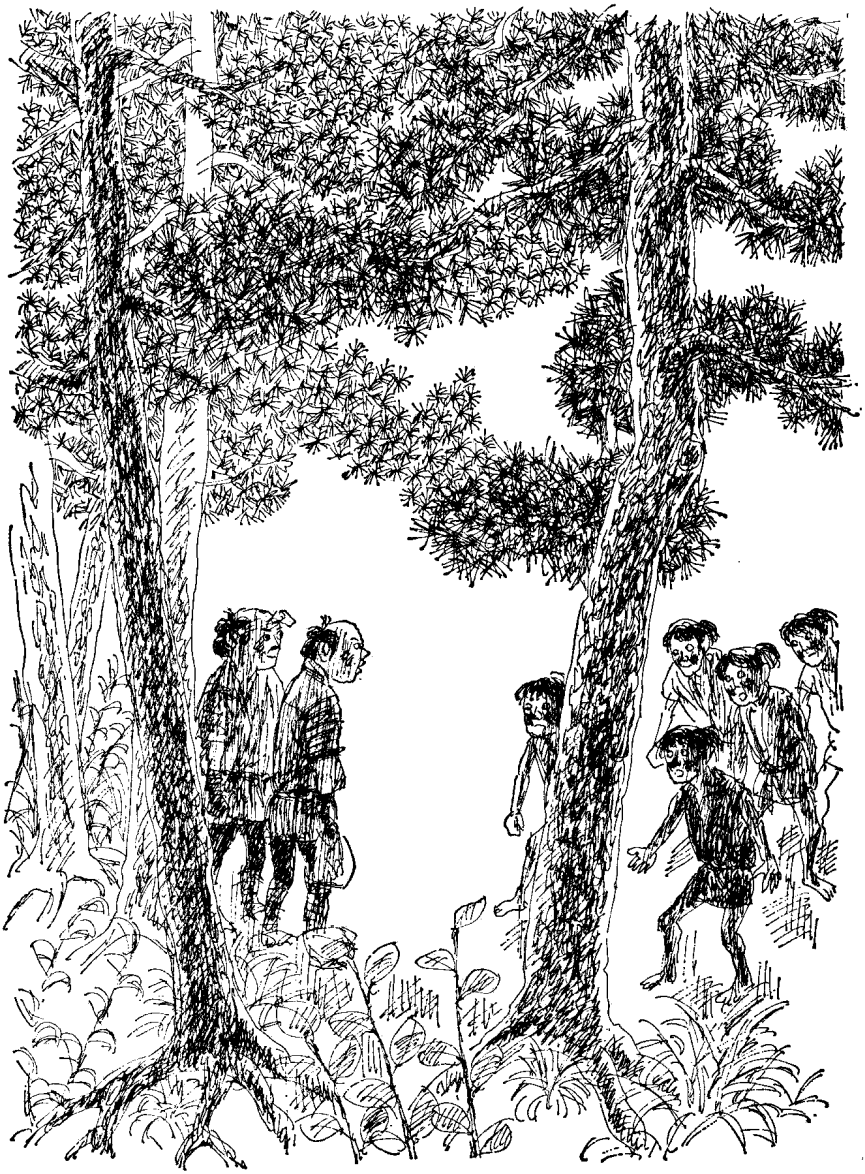
茶店といっても、葦簀ばりの下へ縁台をおいただけのものである。そこでキセルをはたいたのは、ひと目で旅の商人とわかる三十がらみのものである。

「どこでおぼえてきたんだね。その喧嘩のしぐさは……。」

旅すがたの男は大声をあげてわらった。

「おまえたち、いいかげんにあそび人きどりだが、このおふたりさんが、どこのどなたとしらな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



いから、チョボ一へひっぱりこもうとしたんだろう。——そうら、ちゃんと顔にかいてあるぜ。このお兄いさんらは、小糸川の筏ながしの名人さんで、鹿野山では、シカでも、クマでも、鼻のたかい天狗さまでも、素手でひっつかまえるというお人だ。博奕の腕だって、どうして、どうして、木更津の親分衆もはだしでにげだすほどですよ。——やめたほうがいいな。」

そういいながら、ふところの財布をとりだすと、

「おめえたち、銭がほしかったんじゃなかったのかい。アメを買うくらいの銭なら、わたしがあげようかね。」

と、砂の上に小銭をほうった。

あっけにとられていたあくたれどもは、たちまちはいずりまわって、小銭をひろうと、

「——おじさん、そんならありがとさんよ。」

と、礼をいい、声をあげてもみあいながら、松林の中へはしりこんでいく。

みおくった旅の男は、もういちど声をあげてわらった。それから、平六と音松にむかって手をあげた。

「そこのおふたりさん、弁当をつかいなさるなら、こっちへおいでなさい。お茶がありますよ。」

つったっている茶店のとしよりにも、

「おふたりさんにも、お茶だ。」

といった。

「ついでに、なにか、おかずになるようなものをだしておくれでないか。」

この男、江戸の日本橋大伝馬町一丁目にのれんをだす近江屋利兵衛の番頭で、名を庄次郎という。とって三十二才のはたらきざかりである。

庄次郎のながい顔には、まるで夏ミカンの皮のようなでこぼこがある。これは子どものころ、はやりやまいの疱瘡（天然痘）をわずらったときのなごりである。こういうあばたづらを、上総あたりでは「ジャンカづら」という。そのころ、疱瘡は、武士、百姓、町人、男、女と、あいてかまわずとりついていたから、あばたづらはめずらしくもなかった。

日本橋といえば、江戸のどまん中。一丁目、二丁目あたりには木綿問屋がおおい。しかし近江屋の庄次郎は、木綿には目もくれない。上総へ足をはこぶと、小糸川をのぼって市宿村へでた。ここには、たった一軒の旅籠「あきもとや」があった。そこを定宿として桑の木を買いつけていく。

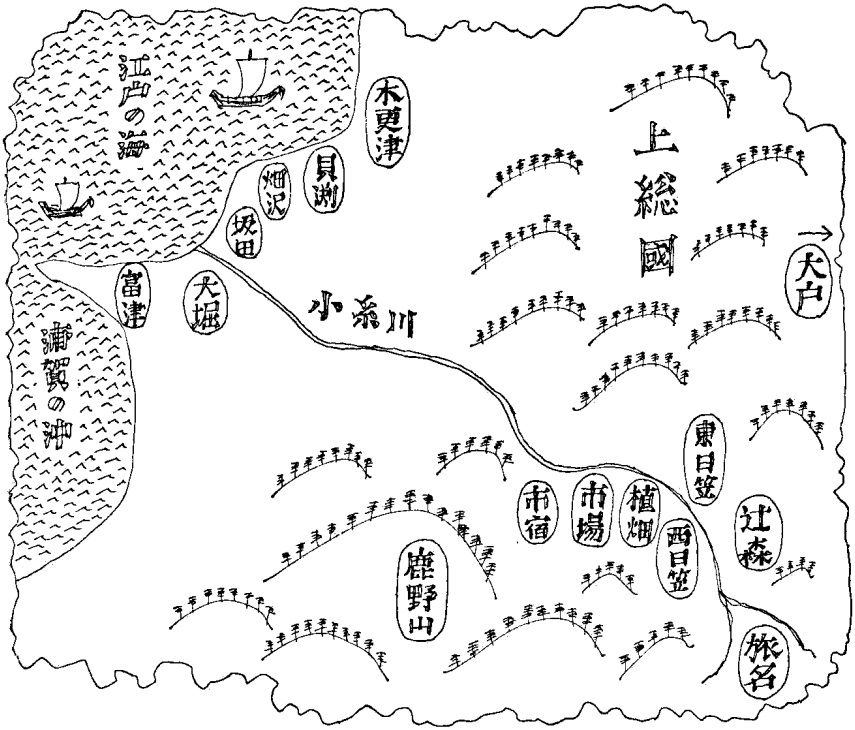
なにせ、せまい村のことではある。平六や音松らも、この江戸の商人とであえば、挨拶ぐらいはかわすこともあった。

「おふたりさんは、たしか市宿のおかたでござんしたね。」

「へえ、わたしが市宿村の平六で、こいつは植畑村の音松です。」

「ああ、植畑村の……。まあ、ゆっくりここで弁当をおつかいなさい。――ところで、おふたりさんは、いつもごいっしょにお仕事をなすっていなさるようだが……。」
「へえ、子どものときからのつきあいで、筏ながしも、炭やきも、気をあわせてやっておりますんで……。」
「けっこうなはなしだ。それで、きょうも筏をながして、この大堀へおいでになったのかな。」
「――これから川をのぼるついでに、すこしばかり荷をはこびます。お江戸の番頭さんも『あきもとや』へおとまりでしたら、わたしらの舟へおのんなさい。」
「そりゃありがたい。ひとり旅というやつはあじけなくていけない。ちょうどはなしあいてがほしかったところですよ。」
庄次郎は、茶店のおやじのだしたお茶を、如才なくふたりにすすめた。

ここで千葉県の地図をみることにする。
まず北に江戸川、利根川のながれがあって、これがかこむようにして県ざかいをつくり、できのいいサツマイモのようなかたちの房総半島が南へつきだしている。半島の東かたは太平洋、西は浦賀水道、東京湾となる。
この千葉県の関東平野部につながる北がわと、茨城県の一部をあわせて、平六のころは下総の



国といった。中央部が上総の国、南部は安房の国となる。安房の国は、「房州」とよぶほうがとおりがいい。

平六と音松が筏をながしてきた小糸川は、上総の国の丘陵地帯の水をあつめて北西にながれ、江戸の海、つまり東京湾にそそいでいた。その川口が、いまふたりが庄次郎のさそいをうけて弁当をつかっている大堀村である。

江戸の庄次郎は、木更津がよいの船で、上総にはいり、大堀へでて、市宿へむかうとちゅうだった。

大堀から六里（一里はやく四キ

ロ）ほど小糸川をのぼると、ながれが中流から上流へとうつるあたりに、上総の国周准郡市宿村があった。戸数八十、川すじにひらけた山村である。こんなところに一軒だけとはいえ、旅人宿があるのも、上総地方の木材、炭、薪などのあつまる土地だったからで、それを買いつけに商人がはいりこむためである。

市宿村から、さらに小糸川をのぼると、戸数六十ほどの植畑村になる。平六は、ここの百姓茂兵衛の六人めに生まれたが、

「こう子だくさんでは、くらしがたたない。」

と、茂兵衛は、平六を円通寺という寺へ小僧にだした。それを市宿村の秋広家が養子にもらうことにした。明和四年（一七六七年）の早春、平六が十才のときであった。

植畑の音松とは、すむ村はべつべつになったが、おさな友だちのふたりは、山仕事から川仕事と、さそいあわせて、まるでひとつ家の兄弟のようにしてはたらいてきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com